
A Mothers lullaby

D.E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Mother's Lullaby

【著者名】

NZT-Ad

D·E

【あらすじ】

1945年の、8月6日。広島の町を焼き尽くした、ひとつの原爆。一瞬にして地獄と化したヒロシマを、少女はひとり歩きつづける。

序（前書き）

序章ですが、しっかり読んで歴史的背景も掴んでください。

あさひは国民学校の3年生になると、厳しくなる戦局のなか、いよいよ本土空襲が始まることを聞いた。

アメリカ軍による、
無差別爆撃がそれだ。

狙うのは軍需施設や大都市であった。

昭和20年、3月10日に東京は焼け野原と化した。

あさひは同年7月に広島の呉市で空襲を体験する。

家は焼かれてしまい、
母と一人で広島市にいる
知人の家に住まうことになった。

転校先の学校では、

朝鮮人の姿がたびたび見られた。

生徒たちは数人の朝鮮人が校門から入ってくるのを見ると、さつさと校舎に入つていつてしまつた。

あさひは、彼らがなにをしに学校に来ているのかしらないけれど、
とりあえず

朝鮮人は避けていた。

彼らもまたあさひたちを
睨んでいたからでもある。

あさひは一度だけ

母親に朝鮮人のことを聞いてみた。

だが黙つたまま知人の

畠仕事を手伝いにでかけてしまつた。

どうやら聞いてはいけないとらしいとあさひは察した。

8月になつた。

あと数日で戦争は終わるなんて誰も思つてなかつた。

そして

終戦よりも人々にとつて
思つてもみないことが
あさひを襲うのだった。

図の予守頭（前書き）

点線を境に場面がかわります。

街の子守唄

広島市にしづく一本の道。わきに古い大きな木がある
その木は、何十年もの間、いろんなものを見てきた。

子供が側で遊ぶなんて

もう何百回と見てきたし、今でも野球や虫とつをする子供達を見る。

その度に、

木はのこと思い出す…

最近では夜になつても

木の側の道を通る人が見えるようになつた。

とは言つても、

そのほとんどは車だ。

広島の街も、

すっかり都会になつてしまい、

木の葉に街の光が反射する。

まぶしいが

あのとき広島を染めていた

赤くおそろしい光よりは、

マシではあつたが。

ある夏の夜。

木は子守唄を聞いた。
美しく、優しい歌声だった。
母親が幼い娘に歌っているようだ。
二人は幸せそうだった。

しかし木は、
それをみて悲しくなる。

あのじとを思い出したのだ。

辛く、悲しい
ヒロシマの悲劇を。

その日の朝。
広島は快晴だつた。

B - 29（アメリカの大型爆撃機）は作戦開始の合図を受けると、

3メートルにおよぶ爆弾を、
広島の街におとす。

「あさひー」

母親の声が外から聞こえた。
あさひは家から裸足のまま外に出ると、
母親の指差す空を見た。黒く、大きな鳥のよつなものが飛んでいた。

「ひこひきー」

あさひはワクワクした

そんなあさひに母親は
静かに言つ。

「お父ちゃん、あれをやつつけているのよ」

「えいごへ..」

「あれで何がわからなかつた。」

「あの飛行機はね、お母ちゃんがおじいちゃんを口口にしてしまつた。」

「おじいちゃん..」

「アハ。だからお父ちゃんがそういふことをやつたの。」

「ふ~ん」

「あれひ、家を燃やされたやつたわよ~?あれもあの飛行機の仕業
なのよ~」

「ねいり~.....」

あさひは、せつと何かを思い出すと、叫んだ。

「かくれなきやー。」

「大丈夫よ。警報もならないし、またいつもの偵察飛行でしょ。」

あさひには、

警報も、偵察飛行もなんのことかわからなかつたが、
大丈夫だと聞かされると、
家にもどり、
支度をして学校に向かつた。

校庭に並ぶと、

先生の掛け声と共に

生徒はそろつて体操を始めた。

軍服をきた先生たちは、

上空を飛び回る飛行機に向かい、

大声をかけはじめた。

「鬼畜米英！神州への侵入による我らが軍神の鉄槌をつけることなかれ！」

「爆弾抱えて海の藻屑となれ！」

いくつかの生徒はまねして黙々立てた。

「勝て勝てにっぽん！」

「ぐんしん敵なし！」

「てんのーへーかばんざあい！」

あさひは仲のいい数人に
先程のこと話をした。

「へえ。あさひちゃんのお父ちゃん、すごいねえ」

「わたしのお父さんは死んじゃったんだって。」

「わたしも。」

あさひは

自分の父親が死ぬことを、
この時始めて考えた。

その時だった。

目の前が青白い閃光に包まれたかと思つと、
轟音とともにものすごい衝撃が
あさひを吹き飛ばした。

田を開いた。

あたりは煙に包まれていた。

そして、

寒くもあり、冷たかった。

「おおお
とこの音がくぐもって聞こえる。

あさひは校舎の陰にいたので300度の熱線を浴びずには、傷もかすり傷ですんでいた。

なにがおこったのかわからなかつた。

ふと、

煙がはれた。

あさひは田をじらす。

黒いものが横たわつていた。

たくさん。校庭中に。

立つて歩くものもあれば、
這いするものもあり、
動かないものもあつた。

それが人間であることには、
にわかには信じがたく、
恐ろしい光景だった。

ふと横を見れば、
ズタボロの服に縫い付けてある袴札から
転がっているものは
さつきまで話しをしていた生徒であることがわかった。
田の前あるものこ、
あさひは思わず飛びのいた

「あやあああー！みよーひやん！」

しゃりくあさひは黙り込んだ。

…………おぬひやん！

あさひは走り出した。

しかし

どこをみても見渡すかぎりの地獄で、人間と呼べるものもなれば、
家ひとつない。

「お母ちゃんー..どーー..」

ズルッ。

何かを踏んで転んだ。

あさひは踏んだものをみて
叫び声を張り上げた。

走つて、走つて、走つた。

目は真っ赤に充血し、
足は血だらけだった。

「おぬちやん！たすけて！怖いよー。」

どこのからか

よくわからない声が聞こえはじめた。

「アイマー。アイマー。」

朝鮮人だったのだが、

誰がみてもそこの人間とかわりはなかつた。

あさひは再び前向かつた。

どこのに向かっていふかもわからぬまま。

小さな母親

「かあちゃん！かあちゃん！」

どこからか幼い男の子の
叫び声が聞こえる。

あれ以来始めて聞く
まともな人間の声だ。

行つてみると、男の子は、
焼けて炭のようになつた
家の前を行つたり来たりしがら
泣きわめいていた。

そしとすぐ近くまでに

炎の波が迫つているのがみえた。

あさひは空襲のときを思い出した。

たくさんのひどが、
いきなり引き返してきたかとおもひと、
一瞬にして炎に飲まれてしまったのを。

あの子もやつになつてしまつ！

あさひは急いで
男の子の手をひいて、
とにかくその場を離れた。

男の子とあさひは、
大きな木の下に座つた。
泣きつづける男の子に、
あさひはそつと言へ。

「泣かないで。お母ちゃんはいいよ」

あさひは母親になりもつてみたが、泣き止まない。

「こいこして。ね？」

あさひは

県の空襲を再び思い出した。

たしかあるあと、

荷物ぐるまに乗せられて、母親と一緒に広島に向かった。

その時に母は、
なにかを聞かせてくれた…

「子守唄・・・」

つぶやくと、

泣きつづける男の子を

膝にのせ、抱き、子守唄を歌つた。

木の周囲には、

たくさんの人人が集まつていたが、
ほとんど死んでいた。

小さな母親の歌声は、
ずっと続いた。

その声は次第に弱くなる。

男子の泣き声はいつの間にかやんでいた。
そして息を引き取っていた。

それでもあさひは歌いつづけた。

かぼそく、

消えそうな声で。

田はづつるだつた。

ひとしきり歌い終わると、
「お母ちゃん……」
と呟き、また歌い始めた。

かすれた歌声もやがて消えて、あさひは横たわる。

「.....」

あさひは

再び田を開けることも、
歌を歌うこともなかつた。

真下の少女が
歌うのをやめたとき、

木は彼女が死んでしまったことを悟った。

木はなにもできなかつた。

死んでいく人々を、
弱くなつていく歌を聞きながら見ておくことしか。

そして

その歌も消えた。

8月6日があわり、
ヒロシマは8月7日の朝を向かえる。

空はまだ明けない。

原爆が炸裂してから、

ヒロシマは夜よつに真つ暗で、燃えていた。

その渦巻く炎の赤い光が、木を不気味に照らしていた

広島はしんだ。

少女も、何万人の人も。

なにもかもを焼き尽くされて、広島はしんだ。

それでも。

ヒロシマに朝がおどずれた

昼間から真つ暗だった
ヒロシマの街を、

朝日が明るく照らした。

昭和20年8月15日。

日本は戦争に負けた。

あさひの母親は、
原爆で即死していた。

戦闘機乗りとして

戦争に行っていた父親は、これよりもずっと前に戦死しており、あさひには伝えられていなかった。

戦争はなくなつたが
この日の悲劇の記憶は、
なくならない。

あれから60年以上が過ぎ木が戦争を見ることはない

そして

あの小さな母親の子守唄は今も木の記憶に残つている

作者後書き

こんにちわ。

「A Mother's Lullaby」の著者のD・Eといつものです。

この作品はですね

中学二年の英語の教科書に載っていたのを詳しくしてみたものなんですね。

原作版だと非常にシンプルで少女の名前はあります
原爆をうけた街の様子の
こともほとんどふれてません。

木が一人の親子の子守唄を聞いて、少女が歌つていたことを思い出し、回想がはじまります。

その回想も、やや薄く、
いきなり少女と男の子が
木の下にいるところからはじまります。

そして、

少女が死んでしまつといつでもあります。

しかも全て木視点。

なんか人々に

「私の陰で休んで。きっとよくなるから」なんじ
話しかけちゃつてますし

それはそれでねや、

今回「れ」を書くにあたつていろいろ工夫したことがあります。

まず

会話に方言を使つませんでした。

普通なら、あんな話し方は誰もしません。

ただ、

みなさんが読みやすいようにと、変えてみました。

それから

「あやひ」とこつね前も少し変わつてますよな。当時であやひとい
うなのはあまり聞きました。

これはみなさんが親しみやすいような名前で、オリジナリティもだしたい感じでつけてみた名前です。

小学3年生にしては、少し幼い感じでしたかね（汗）
ちなみに

あさひの母親は　とし子　あさひの父親は　まやし　男の子は　た
ける

とこひな前も設定として考えてました（笑）

そして、

この話しが読んでいただいた感想はどうでしょ？　イマイチだつ
たかもしれません、その際は是非、
ご意見いただければ今後の小説製作に役立てていきたいと思っています
ので、よろしくおねがいします。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2505f/>

A Mothers lullaby

2010年12月23日02時08分発行